東京福祉会だより

第58号　平成22年7月（通刊81号）発行

響 ひびき

〝響〟とは「郷」の「音」と書きます。私ども東京福祉会では、この温かなものを大切に「心に響く葬儀」を目指しております。

立松 和平さん「道元のさとり、良寛のさとり」（第二回）

橋 幸夫 氏 講演会報告

職員紹介

平成21年度 決算報告／平成22年度スケジュール

当会理事長葬儀

なるほど豆知識／資料請求

社会福祉法人 東京福祉会

道灌山会館　江古田斎場　ホール多摩

道元のさとり、良寛のさとり

（第二回）

後に良寛は書を頼まれると、「一二三四五」や「いろはにほへと」と書いた。これは道元が出合った「一二三四五」なのである。

簡単なのだが深い言葉を、良寛もまた使っている。貞心尼が残した良寛歌集「はちすの露」によると、貞心尼がある時良寛を訪ねた。だが良寛は留守だったので、貞心尼は土産に持ってきた手毬を置いていった。

師、常に手毬をもて遊び給うと聞きて、奉るとて、これぞこの仏の道に遊びつつつくや尽きせぬ御法なるらむ　貞心尼

御返し

つきてみよ一二三四五六七八九の十と納めてまた始まるを　師（良寛）

この手毬こそが、仏の道に遊んでついてもついても尽きない教えなのですねと貞心尼が歌うと、良寛はこう返した。手毬をついてみなさいな。一二三四五六七八九十とついて、十でおさめて、またはじめからつくのです。これが仏の教えですよ。この世界こそが道元とつながっている。

私は「永平録を読む」に出てくる「龍玉を弄ぶ」について語ろうとしている。道元は「典座教訓」の中で、文字ということについて老典座から教えを受けた後に雪竇重顕の詩頌について書いている。雪竇は宋代の禅僧で、「景徳伝灯録」などをもとに先仏の逸話を百則集め、禅の趣旨を漢詩で表現した頌を付けた「雪竇頌古」を編集した。道元が明覚禅師と呼んでいた雪竇の弟子に示した詩頌は次のようである。

一字七字　三五字

万像窮め来たるに、拠を為さず。
夜深け月白くして、滄溟に下る。
驪珠を捜し得ば、多許有り。

（ものごとをいい表わすのに、一字や七字、三字や五字を使うが、森羅万象すべての本質を究めてみれば、すべてよりどころとなるものはない／夜もふけ月はまさに白く輝いて月光は皓皓と降り、大海へと下り、あたりは月の世界ではないものはなくなる／驪珠（驪竜頷下珠・・・竜の顎の下にあるとされる宝珠）を、危険をおかして苦労して手にいれてみれば、そこら中玉でないものはない）

この認識はひとつのさとりである。竜の顎の下にある玉とは、知慧の玉とされ、真理を現わす。この世で最も大切なものである。身命をもかえりみずに真理の玉をやっと手にいれてみれば、そこいら中真理でないものはないということである。

道元が老典座により修行とは何かと示された言葉、「徧界曾て蔵さず」はここにつながってくる。修行は禅寺にいなければできないのではない。禅寺でももちろんできるが、座禅道場である僧堂ばかりでなく、掃除をする寺のすべての建物でも廊下でも、草むしりをする庭でも、鍬を振るう菜園でも、修業道場でない場所はない。座禅は最も尊い修行とされるのだが、作務も負けず劣らず尊い修行である。

道元のさとりを示す「身心脱落」とは、これまでその人を縛っていたあらゆる関係性が崩れ、真理の認識を基準としてまったく新しい関係が組み上がることだと私は想像してみる。「徧界曾て蔵さず」も「驪珠を探し得ば、多許あり」も、新しい認識による新しい関係を打ち立てたということである。

そのように考えると、良寛の話「身心脱落は只だ貞実のみ／千態万状龍玉を弄ぶ／出格の機　虎児を擒にし／老大の風　西竺を像る」は、良寛が道元を身心で理解し邂逅した時の話であるということができる。つまり良寛は、道元のさとりの上にまたさとりを積み重ねたのだ。

それでは良寛のさとりとはなんであったのかが問われなければならない。道元が危険をおかして虎口にはいり虎児を得るようにして摑んで真理を得た後に気づいたことは、真理はそのへんいたるところにあり、真理でないものはないという、いわれてみれば当たり前のことであった。当たり前であるからこそ、身と心とで実践することはまことに難しい。それは一瞬にしてさとった後、長い時間、あるいは一生涯をかけて実践していかねばならないものだ。

道元にしても長い試行錯誤があったのである。「正法眼蔵随聞記」で道元はいう。

我レ在宋の時、禅院にして古人ノ語録を見シ時、ある西川の僧の道者にて有りしが、我レニ問ウテ云ク、「なにの用ぞ。」
云ク、「郷里に帰ッて人を化せん。」
僧云ク、「なにの用ぞ。」
云ク、「利生のためなり。」
僧云ク、「畢竟じて何の用ぞ。」ト。

道元が中国の宋にいた時、禅寺で古人の語録を読んでいた。その時、ある四川省出身の道心にあつい僧が道元に問うた。「語録を見てなんの役に立つのか」

立松和平

立松　和平　（作家）

（1947.12.15－2010.2.8）栃木県出身。早稲田大学政治経済学部卒業。在学中に「自転車」で早稲田文学賞受賞。卒業後、種々の職業を経験、故郷に戻って宇都宮市役所に勤務。79年から文筆活動に専念する。80年「遠雷」で野間文芸新人賞、93年「卵洗い」で坪田譲治文学賞、97年「毒－風聞・田中正造」で毎日出版文化賞を各受賞。2002年、歌舞伎座上演「道元の月」の台本を手がけ、第31回大谷竹次郎賞受賞。2007年「道元禅師」（上・下）で第35回泉鏡花文学賞受賞。2008年「道元禅師」（上・下）で第5回親鸞賞受賞。著書多数

道元は答えた。「故国に帰って人を導くためだ。」

その僧がいった。「それがなんの役に立つのだ。」道元は答えた。「人々を利するためだ。」

その僧がいった。「結果のところそれが何の役に立つのだ。」と。

つづけて道元は語る。語録や公案などを読んで古人の行いの跡を知り、迷っている人のためにその内容を説いて聞かせるなどのことは、自分の修行の上でも、他人を導く上でも、まったくいらないことである。ただひたすらに座禅をして一生参学の大事を明らかにし、仏道が説かれている本当の道理を明らかにしたのなら、たとえ一文字を知らなくても、人に教え示すのに使いつくせないほどである。そうであるからかの僧は、語録や古人の行いの跡などを知っても結局なんになるのだといったのだ。そのことを理解した道元は、それ以後古人の語録や公案などを読むのをやめた、ただひたすらに座禅をしたということだ。良寛の詩「永平録を読む」に戻ろう。ある春の夜、寂寥をなぐさめようとして手にとった「正法眼蔵」を読み進めていくうち、良寛は自分のさとりを道元禅師のさとりに重ねていくのである。

この時に道元が読んだ「正法眼蔵」は文化八（一八一一）年に新しい開版されたもので、与板の曹洞宗徳昌寺住職虎斑の蔵書を借りたものであろうといわれている。

道元のさとりに自己のさとりを重ねようとしている良寛の行いは、このような話によってわかる。

> **吾と永平と何の縁か有る**
> **到る処奉行す正法眼**
> **爾従り以後　知んぬ幾歳なるを**
> **機を忘じ帰来して疎懶に住す**
>
> （私と道元禅師とはどんな縁があるのか／あらゆるところで「正法眼蔵」の教えを受け、まるで命令でもされるかのように実践してきた／それより以後、どれほどの歳月がたったのかもわからない／そのうち心の活きについても気にすることはなくなり、故郷に帰って気ままな暮らしにはいった）

良寛は備中国玉島円通寺で峻烈な只管打坐の修行を行い、その時に道元の「正法眼蔵」を読み、師大忍国仙和尚に印可の偈をもらって得道を認められた。その後諸国の善知識を訪ね遊行をし、故郷越後に帰って一衣一鉢の無所有の暮らしをする。借りた五合庵にはいり、日がな一日子供と毬つきをするという自由自在な暮らしをつづけていく。

道元禅の徹底した展開と実践をなした人物こそが、良寛であると私は慕わしく感じるのである。良寛のその先に、時代こそ違うのだが道元の姿が、見えるような気がするのである。良寛にとっては「正法眼蔵」は生涯を決した書物であるといえる。

改めて良寛は深夜に「正法眼蔵」を手にとって目を通し、他の様々な教えとは趣がまったく違うことに気づく。この書物がすぐれた玉なのかそれともつまらない石なのかと、誰も考えなくなってしまった。五百年間この書物が塵と埃とに埋もれて誰にも見向きもされなかったのは、正しい仏教とは何なのかを選ぶ力がなくなってしまったからだと、良寛は嘆く。道元禅師の昔を慕い、今の世のありさまを嘆いているうち、心の底まで疲れ切ってしまった。こうして良寛は道元への信仰心を露わにするのである。

> **一夜灯前　涙　留まらず**
> **湿ひ尽くす　永平古仏録**
> **翼日　隣翁　草庵に来り**
> **我に問ふ　此の書何に因ってか湿ふと**
> **道はんと欲して道はず　意転労す**
> **意転労すれども説き及ばず**
> **頭を低れ良久しくして一語を得たり**
> **夜来の雨漏　書笈を湿すと**
>
> （この夜燈火の前で涙が流れるのを止めることができず／道元禅師の著作を濡らしてしまった／翌日近隣に住む翁が私の草庵にきた／私に問うた、この書物はどうして濡れたのかと／そのわけをいおうとしていわず、心で悩んだ／悩みに悩んだけれども話すまでには至らなかった／私は頭を垂れ、熟考し、しばらくして一言を得た／昨夜からの雨漏りで、木箱が濡れてしまったのだと）

こうして良寛は徹夜をしたのである。生涯の修行を振り返ったその夜は、まことに充実していたようである。

（完）

立松和平 先生には　去る二月八日急逝されました　先生のお人柄を偲び謹んで在天の御霊の安らかならんことをお祈りいたします

合掌

橋 幸夫 氏　講演会 盛会に

去る4月2日「ホール多摩」において
橋 幸夫さんによる講演会が、開催されました。

当日は、「ホール多摩」近隣の多くの方々をはじめ、当会の新規採用職員が研修の一環として参加しました。

講演は、「母の介護から学んだ夫婦・家族・人生・・・」と題し、橋さんが実のお母さんの介護体験を通しての「夫婦・家族の絆の大切さ・尊さ」、「認知症予防のための日常生活の過ごし方」、「高齢社会における地域の果たす役割」等多岐に渡るものでした。橋さんの示唆に富んだお話に参加者の皆さん大変感動されておりました。

この度の企画は、「ホール多摩」における初めての試みでしたが大変好評でしたので、今後可能な限り引き続き実施したいと思います。

なお、当日参加者の皆さんにお持ち帰りいただいたお土産は、社会福祉法人　時の会「ぐりんぴーす工房（知的障害者通所授産施設）」の利用者の方々が心をこめた手作りのクッキーでした。

職員紹介

平成22年度新規採用した職員を紹介させていただきます。
本年度は男性2名、女性4名の計6名を採用しました。現在、既にそれぞれの職場へ配属され、日々奮闘しております。　まだまだ未熟ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

真境名（まじきな） 亜南（あなん）（業務本部　業務担当部第二課）

4月より「道灌山会館」に配属になりました真境名亜南と申します。今はまだわからないことが多く、日々勉強の毎日ですが一日でも早く、お客様に安心を提供出来るよう知識・技術面共に頑張っていきますので、よろしくお願いいたします。

菊池 太郎（江古田斎場業務第一課）

「江古田斎場」配属になりました、平成２２年度新規採用職員菊池太郎です。アルバイト期間も含め７３ヵ月ほど経ちましたが、まだまだわからないことだらけなので、少しずつでも、自分の出来ることを増やしていけるように努力します。よろしくお願いいたします。

篠田（しんだ） 親一（いちかず）（江古田斎場業務第二課）

平成22年度、新規職員として「江古田斎場」に配属になりました。今は、自分が皆様のためにお役に立てることが少ないのですが日々何かを得ながら成長していきたいと思っています。人に優しく、自分に厳しく毎日を過ごしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

臼井（うすい） 美友奈（みゆな）（江古田斎場業務第二課）

私が祖父を亡くした時、死を受け入れるまでとても時間がかかりました。葬儀をとおしてご家族の皆様がゆっくりと前に進んでいけるようお手伝いが出来ればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

明（あきら） 晴美（はるみ）（ホール多摩　業務課）

４月より「ホール多摩」に配属となりました明晴美と申します。今は日々勉強ですが、お客様や皆様のお役に立ち、大切な人とのお別れの時間を心穏やかに過ごすお手伝いが出来る様に頑張りますので、よろしくお願いいたします。

加藤 京子（ホール多摩　業務課）

「ホール多摩」配属になりました加藤京子と申します。わからない・知らないことばかりで、学ぶ日々を過ごさせていただいておりますが、少しでも皆さまのお役に立てるよう精一杯頑張りますのでよろしくお願いいたします。

平成21年度　決算報告

社会福祉法人 東京福祉会の平成21年度決算（概要）は、下表の通りです。

1．貸借対照表

平成22年3月31日現在

勘定科目		金額（千円）
資産の部	流動資産	1,241,705
	固定資産基本財産	6,736,670
	他の固定資産	2,911,407
資産合計		10,889,782
負債の部	流動負債	401,343
	固定負債	1,270,274
	負債合計	1,671,617
純資産の部	基本金	77,213
	国庫補助金等特別積立金	2,871,573
	その他の積立金	414,601
	次期繰越活動収支差額	5,854,778
	（うち当期活動収支差額）	289,913
	純資産合計	9,218,165
負債及び純資産合計		10,889,782

2．資金収支計算書

自　平成21年4月1日　至　平成22年3月31日

勘定科目		金額（千円）
経常活動による収支	経常活動収入　計　①	3,917,830
	経常活動支出　計　②	3,403,328
	経常活動資金収支差額　③＝①－②	514,502
施設整備等による収支	施設整備等収入　計　④	5,390
	施設整備等支出　計　⑤	40,911
	施設整備等資金収支差額　⑥＝④－⑤	△ 35,521
財務活動等による収支	財務活動等収入　計　⑦	593,212
	財務活動等支出　計　⑧	662,610
	財務活動等資金収支差額　⑨＝⑦－⑧	△ 69,398
当期資金収支差額　合計　⑩＝③+⑥+⑨		409,583
前期末支払資金残高　⑪		510,306
当期末支払資金残高　⑫＝⑩+⑪		919,889

3．事業活動収支計算書

自　平成21年4月1日　至　平成22年3月31日

勘定科目		金額（千円）
事業活動収支の部	事業活動収入　計　①	3,962,336
	事業活動支出　計　②	3,667,973
	事業活動収支差額　③＝①－②	294,363
事業活動外収支の部	事業活動外収入　計　④	31,480
	事業活動外支出　計　⑤	21,121
	事業活動外収支差額　⑥＝④－⑤	10,359
経常収支差額　⑦＝③+⑥		304,722
特別収支の部	特別収入　計　⑧	377,868
	特別支出　計　⑨	392,677
	特別収支差額　⑩＝⑧－⑨	△ 14,809
当期活動収支差額　合計　⑪＝⑦+⑩		289,913
前期繰越活動収支差額　⑫		5,590,227
当期末繰越活動収支差額　⑬＝⑪+⑫		5,880,140
基本金取崩額　⑭		0
基本金組入額　⑮		0
その他の積立金取崩額　⑯		9,916
その他の積立金積立額　⑰		35,278
次期繰越活動収支差額　⑱＝⑬+⑭－⑮+⑯－⑰		5,854,778

行事予定（平成22年度）

展示・相談会／遺産管理セミナースケジュール

開催予定日時※	場　所
10月13日(水)　AM10:30～PM12:30	ホール多摩
11月10日(水)　AM10:30～PM12:30	江古田斎場
平成23年 2月10日(木)　AM10:30～PM12:30	道濯山会館

※開催日時につきましては、予告なく変更する場合がございます。
事前にお問い合わせください。
参加ご希望の方は事前に右記までお申し込み願います。

●お問い合わせは●
社会福祉法人
東京福祉会渉外部
電話03-3823-8026
（月～土/9:00～17:00）

東京福祉会は、今後も積極的に情報開示を行い、皆様方の疑問や不安を解消し、安心して生活していただけるよう努力して参ります。

～東京福祉会理事長　山下 静平　の法人葬が執り行われました～

江古田斎場第一会館2階「唯心堂」

平成22年5月14日に逝去いたしました、当法人理事長 山下静平 の法人葬が、5月16日と17日に、江古田斎場第一会館において執り行われました。

この葬儀は、当法人現職理事長の逝去に伴い、社葬の形で執り行いました。

当日は、東京都、各福祉施設および取引業者の代表者の皆様に多数ご参列をいただきました。

多くの参列者　職員の見送る中　東京福祉会所有の霊柩車にて出棺

ちょっと教えて？ ～なるほど豆知識～

家紋 かもん

「人生楽ありゃ苦もあるさ～♪」皆様おなじみのテレビ番組「水戸黄門」、昭和44年8月4日から40年以上続く超長寿番組ですが、この番組の最後に必ず「この紋所が目に入らぬか。」と葵の御紋が登場します。

この葵の御紋は、いうまでもなく徳川家の「家紋」です。

ちなみに、葵の紋にも様々な種類があり、徳川家の家紋はそのうちの「丸に三つ葉葵」といわれるものです。

現在、日本に存在する家紋の数は、5,000個とも10,000個ともいわれ、正確な数は不明です。

ここで家紋の歴史について簡単にみていきましょう。

家紋の起源は、平安時代の公家が好みの図柄（文様）を自分の衣服や輿車につけ、自分の所有物であることを示したことに始まるといわれています。その図柄（文様）が、やがて人や家を表すようになり、現在の家紋の起源になったのです。

やがて、武家の時代になり武家同士の戦が頻発するようになると、家紋は戦のときに敵か味方かを判別する重要な役割を果たすようになりました。武家の数が少ない時は色で表していました（源平合戦等）が、武家の数が多くなると色では不十分になったため、各家は様々な家紋を定めたのです。

また、家紋は特定の家を表すだけではなく、その家の格や権威も表すようになりました。この時代までは家紋があるのは一部の名家に限られていました。

ところが、江戸時代になると、一般庶民の間にも家紋をつける風習が広まりました。ファッション感覚で家紋を身につける者もいました。そのため、様々な家紋ができ、家紋の数は激増しました。

明治時代になり、封建制度が崩壊すると、全ての人々が名字を名乗るようになり、今まで家紋を持たなかった家でも家紋を定め、使用するようになりました。特に、身分制度がなくなり、全ての家で紋服を着用するようになったため、各家の家紋を定める必要があったのです。

というわけで、家紋の歴史をみてみると、現在、一家にひとつは家紋があるということがいえるのです。

ところで、皆様はご自分の家の家紋をご存知でしょうか。現在、家紋を使用する機会がほとんどなくなっていますので、家紋をご存知ない方も多いのではないでしょうか。

家紋を知る方法は、仏壇やお墓を調べる。（家紋がついていることがあります。）家に伝わる紋付の着物の紋を調べる。本家に聞く。菩提寺に聞く。等が考えられます。

家紋を知り、その家紋の由来を調べることは、ご自身の家のご先祖を調べることでもありますので、思わぬ発見があり、面白いと思います。家紋の歴史を考えると、少なくとも明治時代までは遡ることができるはずです。

すっかり影の薄くなった家紋ですが、現在でも、家紋を使用する機会があります。

それは、お葬儀の時です。かつては、お葬儀の際に家紋を使用される方も多かったのですが、現在都会では少数派になっています。お葬儀の際、ご自分の家に伝わっている家紋をご使用されるのはいかがでしょうか。

私ども東京福祉会では、お葬儀を承った場合、次の物に家紋をつけることができますので、是非ご用命ください。

(1) 式場主看板（式場入口に立てる主看板）に家紋をつけることができます。

(2) 焼香掛（参列者が焼香する香炉を置く台にかける白布）に家紋をつけることができます。

(3) 門灯・花飾りセット（式場入口の両脇に立てる提灯とその下の花飾り）の提灯に家紋をつけることができます。

(4) 水引幕（式場内の天井に張る幕）に家紋をつけることができます。

※葬儀式場によっては、承れないことがあります。
※家紋帳にない特殊な紋の場合、承れないことがあります。

<編集後記>

「福祉会だより（響）」につきましては、本号からデザインを一新いたしましたので、ご意見、ご感想をお寄せください。今後もより親しみやすく、読みやすい編集につとめて参ります。

なお、読者の皆様のプライバシー保護につきましては、法令および本法人の規定に基づき万全を期しております。

■葬儀に関する詳しい資料（施設案内、料金表〈仏式、神式、キリスト式、花祭壇など〉）をご用意しております。お気軽にご請求ください。

① 仏式のご案内 ② 花祭壇のご案内 ③ 道灌山会館のご案内 ④ 江古田斎場のご案内
⑤ ホール多摩のご案内 ⑥ 会友制度のご案内 ⑦ 葬祭のしおり

■資料のご請求はこちらまで

〈電話〉**03-3823-8026** 〈E-mail〉**info@fukushikai.com**

東京福祉会 渉外部 まで（月～土／9:00～17:00）

発行所　社会福祉法人　東京福祉会　〒113-0022　東京都文京区千駄木3－52－1　電話03（3823）8026